

論文審査の結果の要旨

氏名 阿部 敬

本論文は、石材消費戦略論に基づく行動論と石器群のモード論・リダクション戦略論という最新の現代考古学の諸理論に基づいて、九州地方の後期旧石器時代初頭から後半期中葉にかけて展開した膨大な石器群を対象に、その年代編成と相互関係態を明らかにし、さらにその形成要因を追求して構造変動論的説明を与えることに成功した、意欲的かつ完成度の高い論文である。

本論文は、5章から構成されている。第1章序論では、これまでの研究では、特徴を異にする諸石器群が狭い九州島内で複雑に分立し、あるいは併存して展開する考古学的現象を有効に解釈する手段をもたなかったため、諸説が乱立する現状を批判して、その原因が有効な理論的・方法論的枠組みの欠如にあることをあきらかにし、研究史を丁寧に解題しながら、そのための理論と方法を整理する。その結果、社会生態考古学理論に基づく研究方法の階層化が果たされていないという既存研究の問題点を指摘して、石材消費戦略の具体相の解明を出発点に据える。

まず第2章では、考古学的に有効な石材の分布環境を明らかにすることを目指して、九州島内の表層地質の解析に基づき、有効石材環境の利用範囲と遺跡分布を根拠とした地域生業圏を設定する。当該石材を産出する岩体の分布地近辺で、旧石器人は石材を入手し、遊動の過程で石材を消費しながら狩猟採集活動を行ったはずであるから、石材の受給戦略が、まずは行動を規定する第一要因になったとする考察が前提とされる。続く第3章では、対象資料の抽出と編年的検討を行い、これらの石器群を石器モード論の立場から、石材消費戦略の異同を根拠として、石器製作技術行動の束に編成する作業を周到に展開している。石器モードは、利用可能な石材種とその形状、運搬コストと形態、目的とする石器器種の製作技術およびリダクション戦略等の運用方法等の相互関係態として規定されるので、石器モードの構成には、先史集団の技術的環境適応行動が濃密に反映される。この研究法は、これまでの九州島内の研究では意識されてこなかったため、本研究に重厚さをもたらす一因となった。

結論に当たる第4章と第5章では、第3章までの分析によって明らかにされた石器群(石器モード)の構造編年を再度確認し、特に南九州における後期旧石器時代後半期の出現という画期の形成要因とその変容過程を、石材消費戦略を含む適応戦略行動の変化と石器製作運用技術の応答関係という視点から、構造変動論的な説明と解釈を与えることに成功している。

従来九州地方の後期旧石器時代を対象に、これらの最新理論に基づく革新的で具体的な研究を展開した例はなく、その意味では、ひとり九州地方の地域研究にとどまらず、今後の旧石器時代研究の地平を切り開く新たな研究事例を提供したと評価できよう。ただし、本論文が、当該期の九州が現在の本州・四国とともに古本州島という一つの島をなしていた以上、本州西部・四国地域との関係性に関する分析が必要と思えるにもかか

ならず、その評価が手薄なこと、さらに文化的影響関係が濃密と考えられる朝鮮半島の当該期資料との比較に関する言及が不足していること等、不満を感じさせる点もなくはないが、本論文の意義を損ねるほどではない。論文提出者の今後の課題であろう。

従って、本委員会は、博士(環境学)の学位を授与するにふさわしいと認めるものである。